

幼児の金銭感覚

— 子どもの経済生活 その2 —

加 古 明 子

(東京家政大学)

○ 研究目的 本研究は 子どもの経済生活について a. 子ども自身が営む経済行為 b. 子どもにかかわる経済の両面から 一環追究するもの的一部である。今回は 幼児のお金について関心がどうように発現し どんな場面でどうように伸長拡大していくか 各年齢のプロセスについて述べる。今回は 幼児期の金銭への関心興味は、感覚的であって必ずしも理解を伴っていない美態とそこから生ずる問題とを検討する。

○ 研究方法 幼児の身近生活には お金がかかわる場面が多々ある。お金にさわり なんとなく覚え お金と触りやりヒシヒシと来たり 遊びに再現したり実際に消費行為も能う。それらの事例採集 500 余のモチーフを基に考察する。

○ 観点と考察

幼児期を通じて 金銭への関心興味は 家庭の内外で諸多様に表わされる。いずれも ほぼ 感性・感覚的な段階である。但し、その強さや振がりは個人差が著しく まれには ほとんど関心を示さぬ子どももある。子どものお金とかかわる場面は多くは人との係わり(家族・友だち・在り人など)をもっている中で、その生活環境・地域性・親の考え方をともに見えて考察をすすめる。

<1> ロ先き感覚での遊び

① FI に示すように 1歳半以前あたりから 実用行為的な捉え方が始まる。中心は 食べる事。

② 売り買いのまね遊びは 幼児期を通じてさかんに行われ、好きを遊ぶ方の一つである。実際に現金をもって実践する機会が濃くても遊びの中では、ウソコが通用する面白さがある。小学1年次に減少する。

③ 硬貨10円・100円玉への関心が強い。紙幣については低学年でもまだ確たる関心がない者が多い。ましてお年玉を手にして即時金とか親に渡してしまう高級紙幣は“賞”の印象に残るだけで 美感が淡いようである。円型の物とお金に見立てて遊ぶ際にも硬貨が主流で、紙幣を用いてもなお硬貨への関心が高い。

④ 3〜4歳から さかんに桁数・金種の多くなる傾向が現われ、競争心から珍妙な額を言いつつ 算が見うける。口頭で表わす額に必ずしも理解が伴うわけではなく 口先き感覚である。また ヒヤメヒヤメと珍妙な額を言いつつ 音の面白さで気分が活性化される作用ともうかがわれる。暗記力と相俟って ⑤ 無限に至る子もある。また 勢い余ってウソと混在する例もある。いずれもが遊びの世界の中で、教を語りこんで 理屈でせめるには当らない。

<2> 様式を反映する

⑥ 例の子は成人して。当時お年玉の一万円札名に乗った。自分の名をついた通帳をほとんど子どもが持っている昨今、カード・バーコード・暗証番号・メーブル・金貨・レンタル。円高などの語が幼児の口につくようになってきた。⑦ 例の子でなく、大人の会話も行動もよく見聞させて、斑々ながらわかる範囲を広げてしまう。TV番組クイズによる

りか、外国貨の呼称が混在する例も採集して。

遊び中の会話に、「月給が上がる」「ボーナス出るあけます。」など辛さを再現する例がある。FIIに示す年齢的な伸長は、一定の歳と手順がある。物とお金を具体的な操作する体験と、その体験と体系化し意味づけることで 初めてその子どもの内に定着する。家庭に在る時に見せる面だけでなく、親の目や面がゆとりで行動に示唆が多く含まれている。先を急がず、生活に確かさを。



